

第三位

「果てしない」ものへの憧れとヒトの強さ

情報工学科五年 岸上 沙布

私は先日『果てしない物語』という本を手にとった。「果てしない」そこに惹かれない人が居るだろうか？「果てしない」ものにヒトは常々惹かれるようにできている。永遠だとか久遠、不変だとか。実際にはそんなもの、この世に存在しない。常に総てのものは移り変わってく。だからこそ惹かれるのかもしれない。ヒトは貪欲な生き物だから、つい無いものねだりをしてしまう。しかし、永遠なるものは、ずっと変わらぬものはきっとある筈だ。人の思念に、ものに込められた思いに。「瞬間は永遠だ」そういう言葉を昔、聞いたことがある。その刹那に起きたことは、それを味わった人にとってはいつまでも変わることのない思い出だ。その瞬間は確かに訪れたのだから。だが、そんな屁理屈で満足するような人間じゃあない。やはり、` 確実 ` なものを求めてしまう。

この本の主人公も 　　もしかすると、この本の著者も、この本を手にとる読者も 　　その「果てしない」という言葉に惹かれたのだ。永遠を自分の目で確かめたかったのかもしれない。

物語のおしまいはいつもちょっぴり切なくて、どこか哀しい。ハッピーエンドの物語であっても、それが終わってしまう...そう思うと悲しくなる。だが、もしこの世に「果てしない」物語が存在するとすれば...？ そうなれば物語を読み終える度に訪れるあの物悲しさを味わうこともなくなり、新しい物語との出会いを要することもなくなるのだ。なんと魅力的なことだろう。しかし、やはり` 始まり `のあるものには` おしまい `があるのだ。この本も、そうして終わっているのだから。

この本を読んで、まず感じたのは、` 満足 `。他の本同様終わってしまったのにも拘らず、何故か満足できるのだ。何故か。それは...きっと、その人と主人公のバスチアンがともに同じ体験を味わえるからだろう。バスチアンが本を手にし、手に汗握る` 本の中の冒険 `を読むのと、私たち読者が一緒に行動できる。そんな物語はなかなかないだろう。バスチアンが本の世界にのめり込めば込む程、私たちも一緒にのめり込む。一緒に味わっている、その共同感がたまらない。読書は孤独なものだから、感動を共有できる人が居る、それはとても素晴らしいことなのだ。それも、同時に感動を、スリルを共有するとなると嬉しいことこの上なかつたりする。

しかし、途中でバスチアンは` 読者 `から` 本の中の住人 `へとになってしまう。けれど、

一度思いを共有した者同士ということが残念に思う気持ちをなくしてくれる。そうって
もまた一緒に冒険をし、スリルを味わえる、共に喜びを感じれる...そう読者は思えるのだ。

ヒトは生きていく中で様々な望みを抱く。だけど、その望みの大抵は叶わないものだ。
簡単に叶うとどうだろう？きっと無気力になるだろう、何をする気にもなれずしまいには
生きることすら面倒になるかもしれない。望みがなかなか叶わないから、ヒトは頑張れる。
どれだけ自分の望みを叶えられるか、望みに向かって常にヒトは努力している。中には諦め
たりすることもあるが、それでもいつも諦めてばかり、というわけではない。自分なりの
結末が見えるまで頑張るだろう。ヒトはポジティブな生き物だと、そう思う。どんなにめげ
てもまた新しい望みは生まれる。そうしてまたその望みを叶えるべく頑張れる。ヒトは意
外と強い生き物だ。もし、望みが全て叶ったら？それは凄いことだ。羨ましい限りである。
そう思う気持ちは十二分にある。だが、それではいけない。望んだことが全て叶えられて
しまったら、それが何の努力も無しで叶えられたとしたなら、どんなに味気ないことだろう。
きっと最初のうちは貪欲にあれもこれもと願うだろうが、いずれは...無気力にならざるを
得ないだろう。努力をすることを放棄すればその人生は輝きを失う。その人の輝きがなくな
れば人としての魅力もなくなる。人の素晴らしさはその人の努力によってのみ勝ち得られ
るのではないだろうか。

本の中でバスタアンは一度生きる気力を失う。全てどうでもよくなってしまったのだ。
そんな彼を救ったのは、アトレユという友達だ。友達のありがたさ、素晴らしさ、それを
この本を通して感じた。それと共にこの本を読んで私は、ヒトの強さを改めて知ったような
気がする。ヒトは一人では生きられない。孤独に非常に弱い。ヒトは弱い生き物だ。だが
私はそうは思わない。ヒトは確かに一人一人ではとても弱くて儂いが、ヒトは強くなれる。
誰かのために強くなれる。家族であったり、友達や恋人であったり、誰のためでもいい。ヒ
トは愛しい誰かのために、大切な誰かのために頑張ることで成長できるのだ。「大切な誰か」
の数だけきっと、ヒトは強さを得られる。私はこれから人付き合いをして生きていく中で
そんな自分を成長できるような、成長させてくれる大切な人を数多く作りたいと思う。そ
うして日々精進し成長していければ、と願う。

「果てしない物語」 ミハエル・エンデ作 岩波書店